



## 岐阜米穀(株) メールマガジン

### 今回のテーマは「お米の作柄の指数の怪」

農水省統計部が、9月25日時点のお米の作況指数を公表したのが、午前10時。夕刊に十分間に合う時間帯でした。夕刊に間に合わせたのは、全国紙ベースで共同通信、読売新聞、毎日新聞の3社。ロイターは、共同電を使って速報しておりました。日本経済新聞、朝日新聞、NHKは、明日の朝刊に回したようですね。

作況指数が106と全国最高だった北海道。前回8月15日時点の作柄概況では「平年並み」(99-101)でした。それが9月25日時点で106(良)と出してきました。どうして尻上がりになるのでしょうか。不思議ですね。

前回調査に問題があったと思います。人工衛星と気象データだけで判断した結果でした。その間、気象も順調でしたが、「平年並み」から「良」に2ランクアップは、初めて聞くような例です。

次いで現場から「一俵半落ち」という情報があった青森は99(平年並み)でした。これも尻上がり。前回調査は「やや不良」でした。9月上旬には線状降水帯がどっかりと居座り、低温と日照不足が続きました。誰しも「やや不良」か、ひょっとして「不良」(94以下)かも」と思っていたところに、なぜか99(平年並み)。

9月25日時点から実測調査となりました。調査方法に大きな欠陥があることを露呈したような結果の数字です。いずれにせよ今回の作況指数は、「22年産のコメ作況『平年並み』」という見出しで報道されました。

こうした報道に接したスーパー、コンビニ、大手外食チェーンなど主要な買い手はどう反応するでしょうか。おそらく「平年並み」なら、令和2年産、同3年産の米も余っていることだし、何も買い急ぐことはないと判断するでしょう。新米商戦が今ひとつ盛り上がらないのは、事実を反映しない作況指数の報道に原因があると思います。

さて正味の作況指数について触れてみましょう。ざっくり感では97程度でしょう。数量にして需給のショート分は21万トン。現在の民間在庫は200万トンちょっと。適正在庫は180万トン。ショート分を差し引けば、ややタイトになります。

もしここで食料安全保障の問題が議論されて、適正在庫が上方修正されると、逼迫感が出てくるでしょう。それを無視しても適正在庫を割るようであれば、マーケットは確実にタイトになります。

8月の概算要求の内容から判断すると、令和5年産も減反にドライブがかかっています。来年も、例年のように異常気象に見舞われるとしたら、民間在庫は150万トンぐらいに落ちるでしょう。

これで米余りはピリオドを打つでしょう。異常気象や肥料高などで農家が減っていけば、米価の暴騰というシーンも出てくるでしょう。数年後には、減反奨励金ではなく、増反増産奨励金のようなものが出てくるかもしれません。

令和4年産米の価格上昇が現実のものとなる時期について予想してみたいと思います。大手ユーザーが、令和2年産、同3年産の消化に一段落をつける来年4月頃でしょう。それまでもじわじわと値上がりますが、さらに一段の値上げを示すという意味での価格上昇と考えてください。